

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

今年の長野県大会…教訓を伝えること

今年の長野県大会は6月1日から3日、北信飯縄山で行われた。出場校は男子17校、女子が5校。飯縄山はこれまで県大会や北信越大会で何度も使われてきた。しかし、これまで僕がかかわった飯縄大会は、何らかのトラブルがあった。1990（平成2）年、第2回北信越大会で大雨の中、県外のA高校の女子生徒が瑠璃山頂で意識不明になったため、スキー場を搬送しておろした。1994（平成6）年山頂にザックを残したまま、B高校の一人の生徒が行方不明になり大騒ぎになったこと。当の生徒は自分の荷物と仲間を置き去りにしたまま、全く方向違いの鳥居方面に下りて、車道で発見、事なきを得たが…。2010（平成22）年にはC高校の生徒が、霊仙寺山と飯縄山の鞍部で捻挫をし、緊急搬送をしたこと。そして、今年。初日の生活審査は無事に終わったが、深夜に猛烈な雷雨。雨と落雷が激しくテントを襲った。しかし、朝になると雨はすっかり上がり、青空が広がり絶好の登山日和・・・と思えた。役員はみな配置につき、生徒も出発。小生も先回りをして審査のポイントに向かうべく、飯縄山へと登った。ところが1時間ほどたったころ、一点にわかに掻き曇り、ポツリポツリと雨が当たり始めたかと思うと、一気に雨脚が強くなり、ゴロゴロドカーンと雷が鳴り始めた。これはやばい、すでに生徒は出発しているが、大丈夫だろうか、山頂に急ぐ。

ずっと山の裏側で無線が傍受できなかったのだが。山頂につく手前、本部からの無線を傍受した。その無線を聞いて安堵した。専門委員長の池迫さんは賢明だった。すでに本日の行動について中止を決定し、全選手にスタート地点への引き返し命令を出していた。山頂では雷は一時の激しさはなく、薄日も射してきたが、あの時点での判断は間違いはなかったと思う。それくらいの雷だった。そんなわけで、長野県大会はメインの登山行動がなくなってしまった。その後、雨は再び激しくなる。スタート地点のテン場に帰った生徒たちを予定通り移動させなくてはならないので、キャンプ場のマイクロを借りたり役員の車を使ったりして、初日の幕営地の飯縄東高原から、2日目の幕営地の戸隠まで搬送する算段をした。これで一つの懸案事項は片付いたが、問題はそれで終わりではない。県大会と銘打ち上位大会への選考会である以上、ペーパーテストと生活技術のみで順位をつけるのでは生徒も納得しない。いかに順位をつけるか、なんとか生徒が納得できるように、たとえ距離は短くとも、最終日に戸隠から瑠璃山までというコースで審査をしようと、審査員会で内容を検討する。帰りのバスの時間などの制約もある中、何とか審査項目を決め、審査の体制を整えて、夕刻のリーダー監督会議で伝えた。

翌3日、幸い天候も回復し、大会を無事終えることができた。しかし僕は栃木の雪崩事故検証委員会のために、その競技を見ることも、審査することもなく、早朝宇都宮へ向かった。で、宇都宮に着いた頃、生徒から連絡が入った。「先生、負けちゃった・・・。」結果は男子優勝松本県ヶ丘、2位大町岳陽、3位屋代。3校の差は本当にわずかだった。そして、女子は優勝松本県ヶ丘、2位大町岳陽、3位飯山。本校は男女ともに2位、残念ながらIH出場を逃した。口には出さなかったが、生徒たちの落ち込みぶりがわかってつらかった。特に男子は0.35点差という僅差、女子も3点差。残念だったが今年のメン

バーは男女ともに、チームワークも最高で、後輩との人間関係も極めて良好、みんな本当に山が好き な子に育ってくれた。素晴らしい子たちだ。きっと北信越で切り替えて頑張ってくれるだろう。

それは、ともかく飯縄山での大会は・・・やはり何かがある。今回無理して大会を強行したとしても恐らく何も起こらなかつただろう。しかし、物事は結果ではない。今回の中止判断には僕は直接かわらなかつたが、僕が責任ある立場にあったとしても同様な結論に至っていたと思う。飯縄での大会にしばって、トラブルを前段に書き並べてみたが、高体連の大会ではこれ以外にも一歩間違えばというようなことが何年かに一度起こっている。これらのことを思い返してみると、その時にきちんと反省され、総括されたかといえ、必ずしもそうはなっていないことにも気づく。そしてそれがちゃんと経験として受け継がれているかと言え、決してそうは言えないことにも気が付く。・・・山ではいろいろなトラブルがある。そしてその多くは事なきを得ている。自戒を込めてこのことは肝に銘じたい。

一方、これは報道もされていることだが、今回栃木の雪崩の事故を検証している中で、実は7年前にも当該の研修会の実施中に雪崩事故に遭っていたことがわかった。他山の石としなければならない・・・改めてそう思う今年の県大会だった。

四半世紀の時空を超えて・・・アリューシヤンのルピナス

去年、妻に言われ、ちらかった登山道具の整理をしていたら、道具箱の中に入っていたふるぼけたフィルムケースの中から何粒かの花の種が出てきた。

「なんの種？」ずっと忘れていたのだが、そう聞かれて、思い出した。1993年にアリューシヤン列島に遠征したとき、最初に目指したマクシン峰に登るために登山基地のダッチハーバーから飛び立ち、山のふもとで飛行機を降りた僕らの前に一面に広がっていた一面のお花畑に咲いていた花。その花がルピナスだと教えてくれたのは、同行していた蝶の写真家渡辺康之さん。そのころは、登ることにしか興味がなく、花の名前など知らうとも思わなかつた。しかし、低気圧の墓場とも呼ばれるアリューシヤンは、その名の通り総じて天気が悪く、行動できないことも間々あり、そんな時は山も見えないので、自然足元の花に目が行った。渡辺さんは蝶の研究者でもあるので、食草となる植物にも詳しく、僕の問いかけに、花の名を丁寧に教えてくださった。高緯度にあるアリューシヤンでは、海岸線にも日本の3000m級の山に咲く高山植物が咲き乱れている。その時覚えた花の名前は いまだに憶えている。渡辺さんは僕に山のまた違った一面に目を向けることを教えてくれた恩師である。それにしても、未知の北の大地に一面に咲くその花の美しさには心を打たれた。高山植物でもないルピナスなど今は珍しいとも思わないが、あのとき一面に広がるルピナスは心から美しいと思った。登山を終えて降りてくると、すでに花の時期は終わっており、はじけんばかりに種がついていた。この種を持って帰って蒔いたらつくか知らん、そう思ってフィルムケースの中に収めたのだった。妻が「花が咲くかしら」と、植えてくれたのをすっかり忘れていたのだが、春になって「お父さん、ルピナス生えてきたよ」と、妻は大事に育ててくれた。そのルピナスが6月になって咲いた。紫の花はまがうことなくアリューシヤンで見たあのルピナスに違いなかつた。濃い紫と薄い紫、葉の色も少し違う2種類のルピナスが、忘れていた四半世紀の時空をこえて花開いた。アリューシヤンでは7月に咲いていた花が日本では6月に咲いた。